

北海道医療大学学術リポジトリ

# 箱庭制作体験の深まりにつながる関係性・主体性の研究(平成19年度心理科学研究科臨床心理学専攻修士学位論文要旨)

著者名(日)	茅野 侑子
雑誌名	北海道医療大学心理科学部研究紀要 : J Psychol Sci
巻	3
ページ	145
発行年	2007
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00006860/">http://id.nii.ac.jp/1145/00006860/</a>

## 箱庭制作体験の深まりにつながる関係性・主体性の研究

茅野 侑子

箱庭療法には、イメージ表現による体験から制作者に何らかの気づきが起こり、さらに面接者との話し合いを通じて気づきが促進され、無意識から意識へと領域が拡大もしくは意識の質的変容を得て体験を深め、自分のものにしていくという過程がある。平松ら（1998）は、箱庭療法の過程の中でも、制作した箱庭作品を媒介とした言語的なやりとりにおける体験過程の深まりに着目した。それを測定するための箱庭療法面接のための体験過程スケールを開発し、箱庭表現によるクライアントの主観的体験過程が研究されてきた。平松ら（1998）が「制作者と面接者の協調的關係」「箱庭作品を介しての言語的応答（作品の象徴性の共有）」に着目する一方で河合（2002）は、「制作者の箱庭制作に対する主体性・親和性」という概念から箱庭制作者の主観的体験に関心を寄せた。

### ＜研究目的＞

本研究では箱庭制作体験過程を深める要因として「制作者の箱庭制作に対する主体性・親和性」「制作者と面接者の協調的關係」「箱庭作品を介しての言語的応答（作品の象徴性の共有）」に着目し、この3要素がどのように関連しているのかを明確にすることを目的とする。また、箱庭療法体験過程の研究において、箱庭体験スケール（EXPspスケール）を用いて研究者により被験者の制作した箱庭を評定し、そのデータから物事というのではなく制作者自身のことばで制作者の体験過程、ひいては箱庭療法について研究したいと考えた。また試験的な方法により3要因から制作者の主観的な箱庭制作体験過程の深まりを捉え、今後の研究の方法論を考察する。

### ＜研究方法＞

12名の研究協力者に箱庭を1度制作してもらい、制作終了後に箱庭制作体験と面接者との関係について尋ねた半構造化自由記述と、制作した箱庭から受ける印象の違いから制作者と面接者の協調的關係性をみるために多面的感情状態尺度・短

縮版を実施した。半構造化自由記述は記述データを評定できるよう修正した記述用C-EXPspスケールを用いて評定した。

制作者の制作体験報告内容から、「制作者の箱庭制作に対する主体性・親和性」をみるため主体群と非主体群、関係性は関係良好、関係変化、関係不良の3群に分けた。また研究者からみた制作者との関係を制作者の観察内容、印象と主観をもとに了解と不明瞭に分類した。

### ＜結論＞

箱庭療法における深い制作体験は、制作者と面接者の良好な協調的關係を基盤として、箱庭表現への主体的な関わりから得ることができる。制作者と面接者の関係がよくない場合には、制作者は箱庭の流れにのれず表面的な作品を仕上げる傾向があるため、深い制作体験を得ることが難しい。

箱庭療法の制作体験には、制作者・面接者・箱庭表現という3者の関係が深く影響しており、表現した内容や箱庭制作体験から気付いたことを言語化し意識できる、表現した内容を整理して自分の中に収めることができるかは、制作者と面接者の二者の関係に寄るところが大きいと考えられる。

また箱庭制作体験を検討する際には「作品という表現過程と表現内容」「箱庭作品を介しての言語的応答」「クライアントと面接者の協調的關係」という密接した3要因すべてを対象とし、また3要因のバランスが重要であることもここに示唆するが、各要因の研究手法ならびに3要因すべてを突き合わせてみる研究方法論には問題点が多く、本研究からはその点に関する重要な手がかりは見出せなかった。

### ＜引用・参考文献＞

- 河合俊雄（2002）箱庭療法の理論的背景．岡田康伸（編），現代のエスプリ別冊 箱庭療法シリーズⅠ 箱庭療法の現代的意義，62－73，至文社．  
後藤美佳（2004）箱庭表現に伴う「ぴったり感」に関する基礎的研究—箱庭体験過程スケール（EXPspスケール）からのアプローチ— 仏教大学教育学部会紀要，第3号，151－168．  
平松清志・池見陽・山口茂嘉（1998）箱庭療法面接のための体験過程スケール作成の試み 人間性心理学研究，第16巻，第1号，65－76．